

このお薬師さんて章魚を断つてお願を申すと、如何な疣でも取れるそんな、京に住んでる有難さ、蛸薬師へ毎日日参をして祈つたら如何や」

「成程それは有難い、それでは蛸薬師へ願を掛けよ」

とこれから毎日々々蛸薬師へお詣りを致します、頭にはチヨイと手拭を戴せて歩いて居りますと、此方は鬱陶しいものですから又しても手拭を取つて仕舞ひます。

「貴郎然う自由をして貰ふと困りますがな、皆人が頭が二つ有ると云ふて居ます。伊豫の松山に頭二つの子が出来たといふが、その松山からこの京へでも来て居るのぢやないかと、何うぞ辛棒して被つて居とくはなはれ、そうやないと私が困ります」

「エ、一ツ、捨置け、鬱陶しいわさ」

やうく寺町へ來ますと、丁度夕景になりました、寺々の入相の鐘を撞出しますと(鐘の音)

「龜井、片岡、伊勢、駿河、主君の御供なして一の谷へ

籠近くになりますと、近従の衆

「素破狼籍者、ソレツ、召捕れ」

といふので、何れも袴の股立を高く掲げ、背後と左右から手を挫りました、姿は喜六でも何しろ辨慶といふ豪勇ですから、兩人の者をば引外してドンと投げる、背後から羽翼締に抱へる奴をば、これも拂うてドンと投げる、右から來れば左へ投げ、左から來れば右へ投げる、前から來る奴をば、腰帶を持つてからに上へドンと投られた奴は宙天に行當りまして下へ落ちて來る、二度目に投げられた奴に途中で行逢ふて

「御貴殿お上りか」

「イヤ尊公はお下りか」

まさか其様な事もありませんが、喜六はズン／＼と進み寄り駕籠の棒鼻に手をかけました。

「無禮者待て、何奴なれば狼籍を致す、名を語れ」

「ム、吾名を聞きたくば云つて聞かせん、耳を搔ほじつ

急げく」

「モン何を云ひなはつたんや」

「今のは陣鐘ではないか」

「何を云ふてなアるね、彼れはお寺の入相の鐘ですがな」

「ア、然うか」

これから蛸薬師へお詣りを致しまして、寺町へ参りますと、向ふの方からお越しになりましたのが、堂上方の御佛参の歸りと見へて

「下にく下に居らう、下にく」

と此方へ乗物がやつて参りました、侍士は大手を振つて

「下に居らう、無禮者めが」

と咎めますと、例の辨慶が

「糞でも食へ、俺は武藏坊辨慶だ」

と威張つて大手を振つてやつて参りますので、最早御駕

てよつく承れ、吾を誰れぞと思ふ、天津兒屋根命、中關白道隆公の御胤にして、母は二位大納言の娘、熊野参籠の折柄別當辨正と心を協はせ、遂に夫婦の契りをなせしが我母妊娠となり、十七月經つて男子出生、幼名を鬼若丸と命け、播州書寫山にて成長なし、誕生水別當の屋敷に古跡を遺し、頭髮を剃し、京都比叡山に登り、觀慶阿闍梨の弟子となりしが、其頃武藏といへる荒法師あり、この者相果てしより、跡を繼ぎて武藏となり、父辨正の辨の字と、觀慶阿闍梨の慶の字と、これを合せて、武藏坊辨慶と命けたり、山を降つて大原の里に住みしが、五條の天神へ丑の時詣での折柄、五條の石橋にて牛若丸に出合ひ、名乗れば源家の御曹司、辨慶二十餘年榮華の夢あもなく覺めて京都を拂ひ屋嶋壇の浦の戦ひに、頼朝、義經不和となり、腰越えより追返され、吾れは奥州衣川にて立往生、紀伊大明神と祭籠まれるまで、主君の御供をなしたるこの辨